

『兵衛どんのでんぐ様』

国分高井の鷹合兵衛家は、代々、肝煎役をつとめた家です。広い屋敷に、水がめを三個ものせた、茅葺き屋根の大きな家でした。奥座敷横の十五畳間が、「てんぐ様の間」と呼ばれていました。



家のうしろに、直径八尺もあるタブの巨木に、大蛇のような藤のつるがからみ、「てんぐの間」を覆っていました。この巨木が、「てんぐ様」のすみかでした。兵衛どんの家族や近所の人たちは、この木のまわりを、いつも、きれいに掃除し、御神酒などを供えていました。

ある時、二十九日村（ひずめむら）の若者が、七尾でお酒を飲んで、兵衛どんの前の街道を通りかかりました。そして、大きな声で、「てんぐ様」の悪口を言ったり、通行人や村の人たちに迷惑をかけてしまいました。

その日、二十九日村では、若者が、帰ってこないで、村中総出で、若者を探しました。しかし、若者は、見つかりませんでした。一週間ほど経って、兵衛どんの主人が、「てんぐの間」を覗くと、部屋の隅に、若者が、一人うずくまっていました。その若者の話を聞くと、二十九日村の若者で、「てんぐ様」のおしかりを受けて、この部屋に閉じこめられたというのです。

さっそく、兵衛どんの主人は、この若者のことを、二十九日村へ知らせました。すると、二十九日村の人たちが、四斗樽のお酒を、「てんぐ様」にお供えし、ていねいにお礼をして、その若者を連れて帰りました。

その後、その若者は、一心に働き、家や村のために尽くしました。そして、人々に尊敬される、りっぱな人になりました。

それからは、二十九日村の人たちをはじめ、兵衛どんの前の街道を往来する人々は、タブの巨木の前で立ち止まり、「てんぐ様」へ、一礼をして通ったそうです。

(国分町 鷹合 宇一氏)